

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 風間 伸次郎



学位申請者 坂田晴奈

論文名 フィンランド語の不定詞について —使用実態から見る動詞性と従属度—

結論

坂田晴奈氏から提出された学位請求論文『フィンランド語の不定詞について —使用実態から見る動詞性と従属度—』について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は風間を主査に、副査として学外から名古屋大学教授 佐久間淳一氏、麗澤大学准教授 千葉庄寿氏（なお両氏はともにフィンランド語を専門とされている）、学内よりアジア・アフリカ言語文化研究所の中山俊秀准教授、川口裕司教授を加えた 5 名で構成された。

論文の概要

本論文は、フィンランド語の不定詞（9 形式：A 不定詞基本形、A 不定詞変格形、E 不定詞内格形、E 不定詞具格形、MA 不定詞内格形、MA 不定詞出格形、MA 不定詞入格形、MA 不定詞接格形、MA 不定詞欠格形）の使用実態を調査することにより、主にその動詞性（定形動詞の特徴を保持している度合い）および従属度（上位節に従属している度合い）の観点から不定詞の体系を明らかにしたものである。書き言葉コーパスのデータに基づき、上記の観点からの分析と考察を行っている。フィンランド語の非定形動詞に関する研究としては、Koskinen (1998), Ylikoski (2003) などがあるが、多くは生成文法の理論を用いた構文分析であり、コーパスを用いた数量的な研究は少ない。特に、生産性や動詞性、従属度といった観点からは、ほとんど研究されてこなかった。

本論文の構成は次の通りである。

序章では、本論文に関わるフィンランド語の文法事項を簡潔にまとめている。不定詞には格語尾や所有接尾辞がつく場合があるため、これらの点について重点的に説明を記している。

第 1 章では、本論文で扱う不定詞の定義およびそれぞれの不定詞の用法を概説した。これまでの先行研究を整理しつつ、A 不定詞基本形に関しては筆者独自の分類も提示した。規範文法として、Hakulinen et al. (2004) を主に取り上げ、不定詞に関する記述を詳細に検討した。本論文が使用する動詞性や従属度という概念についても、それらの判断基準を設定した。

第2章では、本論文で行った研究方法について説明している。データとして用いたのは、フィンランド語のコーパス・デポジトリ Kielipankki である。本研究では、この中から Helsingin Sanomat という新聞の1年分の記事をデータに選定した。

第3章では、不定詞として現れた動詞の延べ語数や異なり語数を基に、不定詞の生産性(不定詞として現れた動詞の偏り)を算出した。生産性が高かったのは、MA不定詞入格形、MA不定詞出格形、A不定詞基本形であった。他方、生産性が低かったのは、E不定詞具格形、MA不定詞欠格形、A不定詞変格形であった。さらに、不定詞として現れた動詞の頻度を Saukkonen et al. (1979) における動詞頻度と比較してその散布図を作成し、動詞頻度の偏りを考察した。その結果、E不定詞具格形およびMA不定詞欠格形として現れた動詞の頻度と、Saukkonen et al. (1979) における動詞頻度は比例していないことを指摘した。

第4章では、不定詞それぞれの動詞性について考察するため、不定詞の形態的な特徴を分析した。動詞性の判断基準としては「動詞の文法カテゴリー(ヴォイス)」および「動作主標示」の2点を設定した。動詞の文法カテゴリー(ヴォイス)において、基準を満たしたのはE不定詞内格形のみである。E不定詞内格形は、不定詞の中で唯一能動・受動の対立を持つ。しかし、受動形の頻度は、定形動詞における受動形の頻度よりかなり低いことが明らかになった。次に動作主標示についてであるが、動作主標示が可能であるのは、MA不定詞接格形以外の8形式である。このうち、独自の動作主を標示する例が多かったのは、E不定詞内格形とMA不定詞出格形である。一方、他の不定詞における独自の動作主標示の頻度は低かった。以上の考察から、動詞性が高いのは、E不定詞内格形とMA不定詞出格形であるという結果が得られた。他方、動詞性が最も低いのはMA不定詞接格形であった。以上の3つの不定詞以外は動詞性がほぼ同じであるという結果となった。

第5章では、不定詞それぞれの従属度について考察するため、不定詞の統語的な特徴を分析した。従属度の判断基準としては「上位動詞の項要求」および「不定詞間の従属関係」の2点を設定した。特定の不定詞を項として要求する上位動詞を持つ不定詞は、A不定詞基本形、MA不定詞内格形、MA不定詞出格形、MA不定詞入格形、MA不定詞接格形、MA不定詞欠格形の6形式である。他の3形式では、上位節に従属せずに、文中に挿入された形での構造が多く観察された。

他の不定詞に従属することが多かったのは、MA不定詞出格形、MA不定詞入格形、MA不定詞内格形であった。A不定詞基本形が他の不定詞に従属する頻度は低い。その他の5形式では、そもそも他の不定詞に従属する例が存在しなかった。以上の結果から、従属度が高いのは、MA不定詞出格形、MA不定詞入格形、MA不定詞内格形であると分析した。これらの不定詞は上位動詞と共に構文を成す場合が多いため、このような結果になったものと考えられる。

最後に、第6章では結論として、まず各章の分析結果を整理した。ここでは、不定詞の研究において重要な観点となる、①頻度、②生産性、③動詞性、④従属度の4点を再確認した。これらの観点から9つの不定詞を順位付けし、フィンランド語における豊かな不定詞が織り成す体系を描き出すとともに、フィンランド語の不定詞による諸表現の特性を明らかにした。

審査の概要及び評価

上記のように氏の博士論文は、先行研究をよく整理しそれに対する問題提起を行った上で、独自の観点からていねいにコーパス調査を行い、詳細なデータに基づいて不定詞相互間の違いを明らかにした貴重な研究である。どの不定詞についても1,500前後の例を収集し、それぞれについて、上述の観点から例を分析し、結論を導いている。生産性をみるため、不定詞として現れた動詞の種類をみる場合にも、上位のものばかりでなくいわゆる一回語などにも注目して精密な検討を行っている。先行研究のうちもっとも重要なものには詳細な文法記述がみられるが、本論文のような不定詞の各形式の量的記述は行われていない。これに対し、氏の博士論文は諸事実をデータにより客観的に立証するばかりでなく、オリジナルな発見を多く提示している点でも大きな価値を有している。

本論文において、審査委員より高く評価されたのは、以下のような点である。

- ・先行研究ではもっぱら母語話者の内省に拠っていたいくつかの記述について、客観的なデータからの分析によってその妥当性を検証している。
- ・現れた動詞の種類などについては、ていねいに全て列挙し、その意味的な偏りなどについての詳しい考察を行っている。
- ・不定詞の動詞性と従属度という概念に注目し、これを生産性の分析とも絡めて独自の観点からの分析を展開している。
- ・データの提示に関しても、グラフや散布図を用いてわかりやすく行っている。
- ・グロスや形態素分析など、フィンランド語の具体例の言語学的な提示もていねいに行っている。

もちろん本論文にも改善すべき点が残されている。最終試験においては、審査委員からさまざまな質問、要望が出された。それらのうち、重要な点としては以下のものを挙げることができる。

- ・使用した用語に関してはさらに検討を行ってほしい。フィンランド語による文法用語にはまだ定訳のないものもあるので、その意味や機能を良く吟味して訳語を定めてほしい。
- ・Hakulinen et al. (2004) 以外の先行研究の中にも重要なものがさらに存在する。これらが記述している点のいくつかについては、もう少していねいに取り扱うべきであった。
- ・詳細な分析結果は評価できるが、そこで得られたデータが何を意味しているのか、そのような結果を生み出すメカニズムや理由はどのようなものなのか、今後さらに掘り下げた考察を行っていく必要がある。
- ・言語類型論的な観点から見ると、フィンランド語の不定詞というのはどのような特性を持っているのだろうか。ひいては通言語的にみて「不定詞」のプロトタイプとはどのようなものなのだろうか。フィンランド語の不定詞の研究を通して、さらに大きな問題の解明へ発展させてほしい。

・英語による論文執筆や海外の学会での発表を通じ、フィンランドをはじめとした海外の研究者に本論文の研究成果を示していく必要がある。

これらの指摘も、本論文の全体の価値に対しては何ら影響を与えるものではなく、むしろそのいくつかは本論文の意欲的な試みを認識した上で、さらに建設的な提言を行っているものである。

最終試験における上記のような質問、コメントに対しても、申請者の応答は的確なものであり、指摘された問題点を申請者がよく自覚し、今後それらを明らかにしていくのに十分な見通しと方法論を持っていることが確認された。また今後の課題の解明に申請者が強い意欲を持っていることも感じられた。

審査委員会は、最終試験（公開審査）の結果も踏まえ、慎重な審議を行った結果、上記のように、申請者 坂田晴奈氏の博士学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。